

シリーズ「風疹^{しん}の抗体検査」

今、風疹が、子を産む世代に流行しています。

妊娠が風疹にかかると、赤ちゃんが先天的な病気を持って生まれてくることがあります。

風疹に対する免疫があるかどうかは、抗体検査で確認できます。

この資料は、鹿児島県ホームページの「健康・福祉」の欄を参考にしています。

(その1) 「大した病気じゃないのでは?という誤解」

●風疹って、幼稚園くらいの時にかかる、大したことない病気なのでは?

風疹という病気は、妊娠中の女性の親の世代にとっては、「誰もが幼稚園にかよっているくらいの時にかかる、体中に赤いポツポツが出るだけの、大したことのない病気でしょ?」というイメージなのではないでしょうか。

確かに風疹は、幼児期にかかったとしても、死ぬような病気ではありません。昔は幼児期に大多数がかかって、子を産む世代になるまでには自然に免疫を持っていたのでしよう。

しかし、幼児期に風疹にかかったりワクチンで免疫を持ったりしないまま、子を産む世代になって、その人が妊婦となり、妊娠中に風疹にかかると、赤ちゃんが先天的な病気を持って生まれてくることがある、ということが分かってきました。

先天的な病気とは、「先天性風疹症候群」とよばれているもので、難聴、心臓の異常、白内障という目が見えにくい病気、精神や身体の発達の遅れ、などの症状があります。



●先天性風疹症候群を防ぐために、行政は予防接種の政策をすすめたが…。

先天性風疹症候群を防ぐために、これまでも行政は予防接種を受けることをすすめてきました。しかし、今でこそ、「男児も女児も、2回予防接種を受ける」というのが正しいということが分かって実践されていますが、それよりも上の世代は、年代によって政策がバラバラでした。女性がかかるのがまずいということで女児だけ予防接種を受けたり、受けても1回だけだったり、などです。

また、ワクチンの安全性が疑われて親が受けさせなかった、と話題になった時期もあります。

その結果、今回の流行の感染者のほとんどは30~50歳の男性となっています。ということは、まさに今、妊娠している人の一番近くにいるパートナーさんが、一番危険な集団である、ということなのです。

